



# 持続的な音声言語コミュニケーション力育成に向けた活動および評価方法の検討：プレゼンテーションにおける相互評価システムの使用

濱田, 真由

---

**(Citation)**

神戸大学国際コミュニケーションセンター論集, 19:57-67

**(Issue Date)**

2023-03-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/0100479349>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479349>



## 持続的な音声言語コミュニケーション力育成に向けた

### 活動および評価方法の検討

#### —プレゼンテーションにおける相互評価システムの使用—

濱田 真由

神戸大学 大学教育推進機構 国際コミュニケーションセンター

## Examining Activities and Evaluation Methods for Developing Sustained Spoken Language Communication Skills

### —Using a Mobile Peer-Evaluation System—

HAMADA, Mayu

Kobe University, IPHE, SOLAC

#### Abstract

A in-class student presentation activity using a mobile peer-evaluation system, PeerEval, was conducted. Japanese university students who do not major in English watched the news, made a note and a presentation about it. Before and after the presentation, questionnaires were conducted to examine Japanese EFL learners' attitudes toward activities and the mobile peer-evaluation system. I discuss how it contribute to improvements of in-class activities in the future.

#### キーワード

プレゼンテーション, 相互評価, L2 言語産出, 外国語学習

#### 1. はじめに

グローバル社会の展開に伴い, 日本人の英語運用能力育成は喫緊の課題である。現行の学習指導要領でも外国語の「話すこと」が「やり取り」と「発表」に分かれるなど, 外国語教育においても, 音声言語コミュニケーション力育成の重要性は益々高まりつつある。そのためには, 正確な情報伝達能力を獲得し当該言語が使えるようになることに加えて, それを駆使し多様な状況の下で適切に表現できる能力, 対話者と刻々と変化する状況に応じて調整できる能力, さらに, 文化や言語を共有しない他者との間で良好な関係を築くことができる他文化にも開かれた柔軟な能力など熟達

した言語使用者になることが必要である(高橋, 2012)。

## 2. 研究背景

### 2.1 言語処理の観点から見た発話の困難性

スピーキングのプロセスにおいて、発話計画に基づき脳内でそれを言語化する作業を行うが(Levelt (1989)では「形式化」(Formulation)と呼んでいる)、まず、レキシコンのレマ情報(統語・意味情報)に基づいて文構造が構築され(文法符号化: grammatical encoding)、次に、レキシコンの音韻・形態情報に基づいて音韻・形態構造(音韻符号化: phonological encoding)が構築され、調音操作を経て発話される。したがって、話し手がレキシコンにある語彙を選択し、語彙に格納されている統語・意味・音韻・形態情報を検索するといった処理を自動化することは、スピーキングの流暢性を高める上で重要と言える。しかし、非母語話者は、とりわけこの文法符号化に認知的な処理負荷がかかり、流暢なアウトプットを困難にしていることが指摘されている(森下・横川, 2014)。

このように、語彙と文法の知識が外国語学習において重要であることは言うまでもないことであるが、英語教育の授業実践において、いかに語彙と文法の知識を内在化・定着させ、その運用能力を自動化させることができるかについてはまだ明らかではない。

### 2.2 外国語運用力をつける活動

効率的にコミュニケーションを行うためには、ダイアログにおいて、対話者同士で互いの言語表象を各言語レベルにおいて調整することが相互理解に至るために重要である。対話者同士によるこの言語的要素および構造の反復使用は、相互的同調機能(interactive alignment)の発現によるものと考えられており、これは母語のみならず第二言語にとっても重要であると考えられている(Pickering & Garrod, 2004)。

また、近年第二言語習得および言語教授法についての論文において頻繁に取り上げられている概念として、エンゲージメント(engagement)がある。教育心理学におけるエンゲージメントとは、ある活動に積極的に参加することや、特定の行動に関与することと、理解されている(Fredricks et al., 2004)。これは目まぐるしく変わる現代において、効果的に指導を実践するために不可欠な要素であり、また、教室環境における学習者の行動に直接的に影響するものであると述べられている(Mercer & Dörnyei, 2020)。言語学習は人と関わる要素が強いため、学習者が協働する際、クラスメイト(ピア)の存在および関係性は重要である。エンゲージメントが活発に見られる学習環境とするためには、学習者が学習過程に能動的に関与していく必要があり、それらの過程における互いへのフィードバックや考えの共有、提案や説明はエンゲージメントや認知的発達に影響を及ぼすとされている(Fredricks, 2014)。

このように、相互的同調機能の発現を促すこと、エンゲージメントを高めることは、外国語学習場面においても非常に重要である。それでは、それらの発現を促し、また、2.1 で述べたように、該当言語の語彙と文法の知識を定着、その運用能力をも自動化させるための活動にはどのようなもの

があるだろうか。

例えば、中学校から大学まで広く実践されている活動のひとつに、リテリング(**retelling**;再話)がある。英文を読んだ後に原稿を見ない状態でそのストーリーの内容を知らない人に語る活動(卯城, 2009)であり、本文の内容を正しく読み取っていることが前提となり、かなり程度の高い言語活動である(伊藤ほか, 1985)。リテリングするために、学習者は英文を読んだり聞いたりしてインプットを受けるが、リテリングの活動が後に控えていることで、学習者は能動的にインプットされる言語に注意を向け、内容とともにそれを記憶にとどめることになる。また、ノートテイキングでは、全体の構成を意識し、階層構造でまとめることなどに留意することで、内容を整理して深く理解することが可能になる。

ペアやグループで行うフリートークという活動では、学習者同士が向かい合って、色々なトピックについてアイコンタクトやジェスチャーを活用して、英語で自身の考えや気持ちを述べ、また、質疑応答などを行うことで積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成も目指す(小松原, 2013)。

### 2.3 プレゼンテーションにおけるクラスメイトによるフィードバックの利点

2.2で述べた活動の他にも、プレゼンテーションは、教室環境下で頻繁に行われる活動のひとつである。教室でのプレゼンテーション形態としては、グループに分かれてのプレゼンテーションがある。クラス全体に向けプレゼンテーションを行うのではなく、少人数のグループ内で話すことで、学生一人一人の話す時間を確保することができ、発表者への負担は少なく、また、聞き手の参加度は高くなる(Woodrow, 2006)。一方で、グループに分かれ同時進行的にプレゼンテーションを行うため、教員はすべてのプレゼンテーションを見て評価を行うことが困難である。そのため、クラスメイトによる相互評価を行う教員も多い。

クラスメイト同士でお互いのプレゼンテーションを評価しあうことで、聞き手も評価者として能動的に活動に参加する必要がある。評価を行っていくなかで、学生によるクラスメイトへの評価が、教員による評価と匹敵する結果となったとする研究もある(Patri, 2002)。また、クラスメイトの評価を行うことで、学生による、その活動目的へのより深い理解、さらには学習プロセスの促進へとつながる。

従来の紙ベースでの評価では、匿名性が低く、クラスメイトからのプレッシャーや不安などから、学生による正確な評価が得られにくい。また、教員による学生の評価データの入力および処理も煩雑であり、プレゼンテーション終了後、すぐに個々へのフィードバックを行うことができず、即時性が損なわれることが指摘されている(加野・ゴーベル, 2019)。

そのため、本研究では、オンラインの相互評価システムを用いてグループでのプレゼンテーション評価を行い、授業で実施している言語活動および評価方法に対する学生の意識について、アンケートを用いて調査を行う。

## 3. 授業概要

本稿で取り上げるのは、主に大学1年生を対象とした Academic English Communication の

クラスである。今回は2つのクラスを対象としており、両クラスとも非英語専攻の日本人大学生 30 名程度からなる。このクラスではリスニングおよびスピーキング能力を中心とした総合的な英語運用能力の向上を目指す。クォーター開始時に行ったアンケートでは、すべての参加者が英語での 4 技能のうち、話すこと・聞くことを特に困難であると感じていた。

授業では、日本人でも意外に知らない現代日本の生活・文化について取り上げたニュースを視聴し、その中で使用されている語や構文などの聞き取り、内容をまとめて話す練習を行うことで、英語を的確に聞き取る能力および自らの言葉で滑らかに話す能力の向上を図ることを目標とした。各授業内活動は、プレゼンテーション実施授業回を除く毎回の授業で、また、プレゼンテーションは各クォーター（第3クォーター・第4クォーター）末の授業で行った。授業では、英語を話すことへの抵抗を減らし、また自分の意見を発信する、相手の意見を理解するためにペア活動やグループ活動を多く取り入れている。本稿で取り上げる授業内活動の概要について、表 1 に示す。

表 1 授業内活動の概要

	活動目的	活動内容
フリートーク	英語モードへ切り替えるための Warm-up・リスニングおよびスピーキング能力向上	提示されたトピックについてペアで話す。
ノートテイキング	ニュースの概要の確認・内容理解の促進	ニュースを聞き、後に行うリテリングのためにノートをとる。
リテリング	ニュースの構成の理解・ニュース内の語彙や表現の習得	とったノートをもとに、ニュース内容についてペアで簡潔にわかりやすく説明し合う。
プレゼンテーション	授業内活動の振り返り・統合的な英語運用能力の向上	ニュース内容についてまとめ、トピックに関するリサーチも行い、ペア・グループで発表、質疑応答など行う。

## 4. PeerEval およびプレゼンテーション活動の概観

### 4.1 PeerEval 使用の目的

3 で述べたように、これまでの授業でも、英語を的確に聞き取る能力および自らの言葉で滑らかに話す能力の向上を図ることを目標とし、フリートークやノートテイキング・リテリングなどの活動を行い、それらの活動から学生による使用語彙・流暢性・語彙の多様性・統語的複雑性などの観点から変容も見られてきた(濱田・横川, 2020; 関ほか, 2021)。しかし, 2.3 で述べたように, 特にプレゼンテーションにおいて, 即時的に個々へのフィードバックが提供できない点, 紙ベースでの評価方法では匿名性が低く厳正な評価が聞き手から得られず, その後の改善につながらない点などが問題として考えられた。そのため, 2022 年度第4クォーターより新たに学習者相互評価システムであ

る PeerEval をプレゼンテーションに対する評価方法として取り入れ、グループ・プレゼンテーションを行った。

#### 4.2 PeerEval 使用の流れ

PeerEval (<https://peereval.mobi>)は、学生がクラスメイトによるプレゼンテーションを聞き、リアルタイムで評価を行うことができる相互評価システムである(加野・ゴーベル, 2019)。このシステムは、クラスの設定を行うブラウザベースの教員用システムと、学生が評価を行う際に使用するiOSアプリまたはブラウザベースのシステムの2つの構成要素からなる(ロブ・加野, 2017)。PeerEval を使用する際、教員はサイトに登録せずにシステムを使用することができるが、その場合クラスの実施および結果のダウンロードには時間の制限がある。サイトへ正規の登録を行いアクセスコードを取得すれば、教員は複数の評価基準・クラス・セッションの作成を行い、すべての設定および記録を保存しておくことができる。

授業で PeerEval を使用する際には、教員は事前に教員用システムにおいてクラスの作成・学生の情報の登録・セッションの作成・評価基準の設定を行う必要がある。評価基準設定について、教員はサンプルの評価基準から選択することも、自身で4段階または5段階のリッカート尺度を用いて評価基準をカスタマイズすることも可能である。図1に教員による評価基準設定画面を示す。セッションの設定が終了すると、アクセスコードが生成され、学生は登録されたハンドルネームおよびアクセスコードを用いて自身のページへのログインを行う。本授業では、グループ・プレゼンテーションに対し1つのセッションのみを作成し実施したが、1つのクラスで複数のセッションを作成し、学生自身が使い分けることで、グループを変えての複数のプレゼンテーションおよびその評価も可能である。実際の使用時には、教員自身も学生として登録し、PeerEval 使用前に学生評価画面を用いて説明を行った。

Short label	Explanation	Order
Pronunciation	Take off for katakana English, poor rhythm, intonation, etc.	1
Content	Did they cover the topic well? Did you learn anything from the presentation?	2
Preparation	Was the presenter well-prepared? Take off if the presenter read from notes.	3
Organization	The presentation had a logical flow. All major points were covered.	4
		5
		6

Allow other teachers in my school to use this rubric.

図1 教員による評価基準設定画面

PeerEval は当初 iOS 上でアプリを取得し動作するものであったが、インターネットのブラウザを

通し閲覧可能となったことで、Android 端末およびパソコン等を通し使用することが可能となっている。本稿で対象とした授業では、学生一人一人がパソコンを使用し、授業内活動も頻繁に行っていたため、主にパソコンを用いブラウザベースで PeerEval を使用した。

評価を行う前に聞き手は各発表者の名前(本授業では学籍番号を用いた)を選択し、匿名で評価およびコメントの入力を行った。同じセッション中であれば、評価した内容はいつでも必要に応じて修正することができ、プレゼンテーション終了後すぐに、学生は自身の発表に対するクラスメイトからの評価スコア・コメント・クラス平均点などを閲覧でき、即時的なフィードバックを得ることができる。また、教員も各学生の評価結果やコメント、平均点などのデータを閲覧することができる。これにより、紙ベースでの評価と異なり、評価データの入力や処理も容易となる。図 2 に学生による評価画面を示す。また、表 2 にセッション全体のレポートの一部、表 3 に個人スコアレポート(一例)を示す。

The screenshot shows the PeerEval interface for a presentation titled "000000's presentation". It features three evaluation categories, each with a 5-point scale:

- Pronunciation:** Rating 4 (indicated by a yellow circle).
- Organization:** Rating 1 (indicated by a yellow circle).
- Content:** Rating 5 (indicated by a yellow circle).

At the bottom, there is a "Submit" button and a "Total: 10 / 20" score display. A comment box with the placeholder text "Comment-Drag to enlarge" is also visible.

図 2 学生による評価画面

#### 4.3 PeerEval を使用したグループ・プレゼンテーション授業の流れ

プレゼンテーションの実施にあたり、各学生は、事前に自身が選んだニュース内容についてまとめ、ニューズピックに関するリサーチ、発表時に用いるスライド作成および発表練習を行っている。発表準備段階およびプレゼンテーション開始前に、学生に各評価基準についての説明を行い、理解を徹底した。

授業では、グループに分かれ、ニュースについての発表および質疑応答を行った。プレゼンテーション授業終了後、学生は、クラスメイトからの評価やコメントを反映させ、スライドの加筆修正や再度の発表練習等を行い、Zoomで録画を行ったプレゼンテーション動画を教員に提出した。

表2 セッション全体のレポート

Name	Content	Organization	Preparation	Pronunciation	Average
***	4.5	4.5	5.0	4.0	4.5
***	4.0	3.7	2.7	3.7	3.5
***	4.0	3.5	4.5	4.5	4.1
***	3.7	4.3	3.7	2.3	3.5
***	5.0	4.0	4.5	3.5	4.3

表3 個人スコアレポート

Name	Content	Organization	Preparation	Pronunciation	Average
***	4.0	3.5	4.5	4.5	4.1
Average	4.3	4.1	4.0	3.8	4.0

I feel that you prepared this presentation much. It is a good presentation!

I think the content is nice and concise. So it is easy to understand.

You kept talking without interruption. I thought a little more explanation of the content of the text would be helpful.

## 5. 学生に対するアンケート結果

### 5.1 授業内産出活動に対する評価およびコメント

英語学習に対して学生が抱える困難点や各授業内活動に関して感じたこと、考えたこと、また、この度新たに用いた学習者相互評価システムである PeerEval に対する意識等を調査するため、第3クォーター第1回目授業および第4クォーター最終授業において、英語学習に関するアンケートおよび振り返りアンケートを行った。振り返りアンケート項目としては、授業内活動に関し答えるもの(Q1~Q4)、プレゼンテーションの評価方法については加野・ゴベル(2019)と同じ評価項目を用いて発表者・聞き手としての立場から答えるもの(Q5~Q10)があった。学生は、授業内活動に対する質問に対し、5段階(1. 全くそう思わない, 2. そう思わない, 3. どちらでもない, 4. そう思う, 5. 強くそう思う)での評価を行った。また、第3クォーター末のプレゼンテーションでは、学生は紙ベースでの評価を行い、第4クォーター末のプレゼンテーションでは PeerEval を用いての評価を行ったため、プレゼンテーション評価方法に関する質問に対しては、5段階で紙・オンラインでのどちらによる実施をより好むかを評価した。以下が質問項目である。

Q1 授業内で行ったフリートーク活動は、英語の運用能力の向上に役立っていると思いますか？



Q2 授業内で行ったノートテイキング・リテリング活動は、英語の運用能力の向上に役立っていると思いますか？

Q3 授業内で行ったプレゼンテーションは、英語の運用能力の向上に役立っていると思いますか？

Q4 授業内で行ったプレゼンテーションの評価方法についてどちらがあなたの好みか教えてください。

■発表者として

Q5 評価結果が出る速さとしてよいのは？

Q6 もらえるコメントがよいのは？

Q7 聞き手がより集中して聞いていると思うのは？

■聞き手として

Q8 自身の評価により高い匿名性があるのは？

Q9 より正確に評価できるのは？

Q10 聞き手がより対話しやすい評価方法は？

アンケートには、2クラス合計57名の学生が回答した。表4に第4クォーター末に実施した振り返りアンケートの平均値および最頻値を示す。

表4 振り返りアンケートの平均値および最頻値

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
平均値	4.05	3.79	3.40	4.05	4.44	4.05	3.04	4.46	3.53	3.19
最頻値	4	4	4	4	5	5	3	5	3	3

結果として、概して学生は、フリートーク・プレゼンテーションについて、英語の運用能力向上に役立っていると考えていた。学生からは、フリートークに関する評価を行った理由として以下のようなコメント(筆者により一部字句修正)があり、即時的にトピックに関する自身の意見を考え、相手に伝える練習を繰り返していくことで、学生は自身の流暢性や即興性が向上したと感じていることがわかった。

- 話すこと、書くこと、聞くことが向上した。
- 語彙や流暢性が向上していると思う。
- 発音、文の組み立て、構文の知識が向上した。
- 話す力、英語で考えて話す機会は少ないから貴重。
- 日常会話レベルの英語は意外と学校教育の場ですることがないので、流暢性や即興性が向上したと思う。

ノートテイキング・リテリングおよびプレゼンテーションに関する評価を行った理由としては以下のようなコメントがあり、ニュース音声の聞き取り・内容のまとめ・発話を行うことで、学生はニュース

全体の構成を意識し、また、内容を整理して深く理解することによって、統合的な英語運用能力を向上させたと感じていることがわかった。

- 英語を聞き取った上で、情報を整理することは脳内で同じことをやれば話す能力が向上すると感じた。
- 語彙、聞き取りが向上したと思う。
- 聞き取った英語から重要な点を抽出して書く能力が向上する。
- ノートテイキングで論理的に聞く意識を持てた。
- 発音、流暢性、正確性が向上したと思う。
- 構成を考えて、話すので、あらゆる能力が必要だから。
- 授業を生かす場として良かった。

一方で、フリートークおよびノートテイキング・リテリングともに、学生は話したいことを言語化する作業を行う際のレキシコン内の語彙の検索や選択、また、内容の理解とそれをどのような語や表現、さらには文章構成で話すのかを連続して行うことに困難性を感じていることがわかった。

- 語彙が足りないと思うところがあったので改善したいです。
- 言葉につまることが多くあった。
- 言いたいことや単語を英語に変換できない。
- ノートテイキングでは一部の部分にフォーカスしてしまうことがあったのでバランス良くまとめられるようにしたいです。
- リテリングは内容理解だけでも大変なのに、自分で構成して言葉をつなぐのが非常に大変だった。

## 5.2 学習者相互評価システム PeerEval 使用に対する意識

学習者相互評価システム PeerEval をプレゼンテーション評価に用いることに対する質問では、結果として、学生は発表者の立場から答える質問についてはフィードバックの速さ・もらえるコメントの質の観点から紙ベースよりもオンラインでの相互評価システムを高く評価した。また、聞き手の立場から答える質問において、匿名性の確保についても評価している。

一方で、聞き手による発表への集中の度合い・評価の正確さ・対話のしやすさに関しては、紙・オンラインどちらかへの選好性は見られなかった。しかし、質問 6「もらえるコメントがよいのは」という質問に対し、学生は紙よりもオンラインに対する評価が高く、また、PeerEval で学生が書いた発表者に対するコメントは、紙で実施した際は良かった点へのものに集中したのに対し、オンラインでは匿名性の高さからも良かった点・改善すべき点両方への様々な側面からの記述が十分に見られた。そのため、発表を聞き評価を行う際、学生が聞き手として、発表のさまざまな面に注意を向け質の高いコメントをしたことがわかった。このことから、オンラインで評価を行うことにより、聞き手による能動的な評価プロセスへの参加を促し、プレゼンテーション活動の目的および発表内容への理解や厳正な評価をより促進し、エンゲージメントが高まったことが考えられる。

また、本稿で取り上げた授業ではパソコンを使用しブラウザを通しての PeerEval 使用であった

ため、加野・ゴーベル(2019)でも指摘しているように、学生はアプリよりもブラウザを使用しているシステムの使用および評価に困難性を感じた可能性が考えられ、その困難性が発表への集中の度合いや発表者との対話のしやすさに影響を及ぼした可能性も考えられる。そのため、授業にて使用する際にはどのデバイスを用いてシステムを使用するのかについても検討する必要がある。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、授業内産出活動、特にプレゼンテーション活動に焦点を当て、学習者相互評価システムを用い、それらの活動や学習者相互評価システムに対する学生の意識について、アンケートを用いて調査した。その結果、今回取り上げた授業内活動は、学生の英語運用能力を統語的に向上するのに寄与していると考えられていることがわかった。また、グループ・プレゼンテーションにおける評価方法として PeerEval を用いて相互評価を行ったことは、紙ベースでの評価に対しフィードバックの即時性および匿名性の高さが評価されたことに加え、学生によるエンゲージメントを高め、より質の高いコメントにつながった可能性が示唆された。このように質の高い評価・コメントを発表後すぐに得られることにより、その後のプレゼンテーションの向上に役立てることも可能である。

一方で、PeerEval を使用する際、教員が留意すべき点がある。まず始めに、相互評価システムの使用方法について、プレゼンテーションを行う前に、学生に周知しておく必要がある。本授業では主にブラウザベースのものを使用したが、システムを用いて評価を行う際、学生は適宜アプリのダウンロード・登録されたハンドルネームおよびアクセスコードの入力などを行う必要があるため、評価画面の使用方法に加え、事前にこれらを周知しておくこと、プレゼンテーション当日の使用を円滑に行うことができる。次に、学生自身が評価を行う上で、評価項目を明確に理解しておくことが必要である。これら基準を理解することで、発表者・聞き手として何が求められているのかがわかり、活動目的への、より深い理解、学習プロセスの促進へとつながると考えられる。また、教員は、プレゼンテーション終了後すぐに、すべての参加者分の評価スコアを提示することが可能となるが、授業目的により全体へ公開するのか、個々の学生へのフィードバックとして用いるのかについても判断し用いる必要がある。今後も、これらの学習者相互評価システム独自の特徴などを理解した上で、授業や活動目的、学生の熟達度などを考慮し、活用することは出来ると考えられる。

今回のグループ・プレゼンテーションでは、1グループあたりの人数が比較的少なく(3名~4名)、また、セッションの回数も1回のみであった。今後は、グループ・プレゼンテーションでは1グループの人数を増やす、グループを変え複数のプレゼンテーションおよび評価を行う、評価基準の設定時から学生を参加させる、評価を行う事前・事後でのパフォーマンスの比較を行いどのような点から向上が見られるのか検討するなどし、また、その他の活動でも、語彙処理の促進を促す活動の導入やノートテイキング・リテリングを行う際により段階を設けるなどを行い、活動の改善に活かしていきたい。

## 謝辞

本研究は、2018~2023 年度科学研究費補助金・研究活動スタート支援「インプットが第二言語

産出時における統語処理プロセスの自動化に及ぼす影響」(No. 19K20949, 代表: 濱田真由)の助成を受けている。

## 引用文献

- Fredricks, J. A. (2014). *Eight myths of student disengagement: Creating classrooms of deep learning*. Corwin Press.
- Fredricks, J. A., Blumenfeld, P. C., & Paris, A. H. (2004). School engagement: Potential of the concept, state of the evidence. *Review of Educational Research, 74*, 59-109. doi: 10.3102/00346543074001059
- 濱田真由・横川博一(2020). 「日本人英語学習者のリテリングにおける言語産出に関する一考察: 概要・要点、産出構造、語彙の観点から」『電子情報通信学会技術研究報告』119, 1-6.
- 伊藤健三・伊藤元雄・下村勇三郎・渡辺益好(1985). 『実践英語科教育法』リーベル出版.
- 加野まきみ・ゴーベル・ピーター(2019). 「プレゼンテーション授業における学習者相互評価モバイルアプリ使用とそれに対する学生の意識について」『京都産業大学総合学術研究所所報』14, 47-61.
- 小松原唯弘(2013). 『英語の授業を楽しくする10分間の帯活動』三省堂.
- Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. MA: MIT Press.
- Mercer, S., & Dörnyei, Z. (2020). *Engaging language learners in contemporary classrooms*. Cambridge University Press.
- 森下美和・横川博一(2014). 「第6章外国語学習者の文産出: 脳内にどのような統語表象をもっているか」横川博一・定藤規弘・吉田晴世(編)『外国語運用能力はいかに熟達化するか: 言語情報処理の自動化プロセスを探る』pp.113-135. 松柏社.
- Patri, M. (2002). The influence of peer feedback on self- and peer-assessment of oral skills. *Language Testing, 19*, 109-131. doi: 10.1191/0265532202lt224oa
- Pickering, M. J., & Garrod, S. (2004). Toward a mechanistic psychology of dialogue. *Behavioral and Brain Sciences, 27*, 169-226. doi:10.1017/S0140525X04000056
- ロブ・トーマス, 加野まきみ(2017). 「学習者相互評価モバイルアプリによるカルーセル・プレゼンテーションの促進」『平成29年度ICT利用による教育改善研究発表会資料集』pp.142-145.
- 関君恵・濱田真由・横川博一(2021). 「日本人英語学習者のリテリングにおける言語産出の変容: 語彙・統語的複雑さを中心に」『電子情報通信学会技術研究報告』121, 19-24.
- 高橋登(2012). 「1章 言語力の発達」福田由紀編『言語心理学入門: 言語力を育てる』pp.9-23. 培風館.
- 卯城祐司(編著)(2009). 『英語リーディングの科学: 「読めたつもり」の謎を解く』研究社.
- Woodrow, L. (2006). Anxiety and speaking English as a second language. *RELC Journal, 37*, 308-328. doi: 10.1177/0033688206071315